



鶴田吾郎が描いた中国風景 —近代日本美術の図版発掘 (1) —

彭 国躍

(非文字資料研究センター 研究員)

1. はじめに

近代日本の美術は、明治から昭和にかけて、西洋美術を学び吸収する時代から、それに抗いながら追いつき追い越そうとする時代へと変わりつつあった。その時代の画家たちにとって、どのように描くかだけでなく、何を描くかという画材の発見、発掘も喫緊の課題となっていた。中国大陸の風景は、当時の画家たちにとって格好なモチーフとなり、画材発掘の新天地と目されていた。1945（昭和20）年までの画家たちは個人の写生旅行、通信社・観光会社による委託取材や軍部委嘱による戦地記録画の制作などさまざまな機会を利用して中国大陸に赴き、日本とは一味違う美しい自然、哀愁漂う遺跡、異郷の生活情趣、そして破壊された戦跡などの多様な風景画を描いていた。

しかし、第二次世界大戦の末頃、広島、長崎の原爆の外に、東京、横浜、名古屋、大阪、神戸など多くの都市が大規模な空襲に見舞われ、廃墟となった。その中で大小さまざまな美術館、博物館、ギャラリー、そして多くの画家たちのアトリエが焼失した。80年ほど経った今となっては、歴史の闇に埋もれたかつての美術作品の図版発掘は美術史研究、図像学研究においてますます重要な意義をもつようになってきた。

2. 鶴田吾郎と中国大陸

洋画家鶴田吾郎（1890～1969年）は、東京市生まれで、15才の1905（明治38）年に倉田白羊（1881～1938年）の門下生となり、洋画を学び始め、翌年には白馬会研究所に入り、同年秋に太平洋画会研究所に移った。27才の1917（大正6）年頃に中国東北（「満州」）と朝鮮、シベリアに放浪の旅に出た。3年後の1920（大正9）年に友人の中村彝（1887～1924年）の誘いで帰国したが、その後も足繁く大連やハルビンなどに行き来していた。47才の1937（昭和12）年頃には新聞通信員として中国東北とモンゴルを訪れ、翌年の1938（昭和13）年7月に陸軍従軍画家として川端龍子（1885～1966年）と共に北京とその周辺の華北地域（「北支」）を訪れ、10月には海軍従軍画家として華中（「中支」）の揚子江沿岸をまわり、1939（昭和14）年5月には再び川端と共に華中地域に赴き上海から南京、漢口、南昌などを訪れた^①。彼はたび重なる大

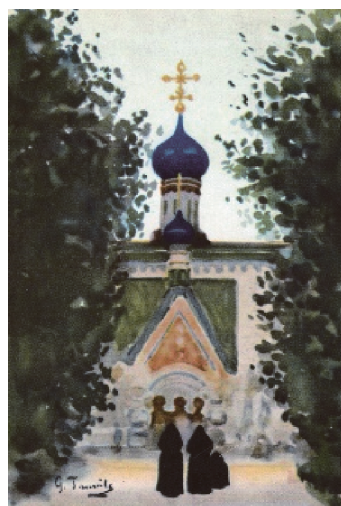
陸訪問の中で数多くの中国風景の作品を制作していた。

戦後、彼は従軍画家としての経歴と戦争画の制作により、藤田嗣治（1886～1968年）と共に「画家の戦争責任」の論争に巻き込まれ厳しい非難の矛先を向けられていた。彼の作品原画の多くは、戦災による散逸の外に、戦後彼自身による身辺整理でも焼却され^②、現在中国関連の作品は名古屋市美術館所蔵のコンテ素描「哈爾濱（教会）」（1917年）、「哈爾濱（郊外）」（1917年）、「熱河」（1937年）、千葉県立美術館所蔵の油彩画「蒙古の女」と「憶ひ出の広安門」、淡彩画「廟と老人（張家口）」などわずかしかが残されていない。

3. 中国風景の図版発掘

筆者の収集と調査により、鶴田吾郎が描いた中国関連の作品の図版は全部で25点発見された。今回は調査報告としてそのうちの8点を公開し、その出典と図版サイズを明記した上で、作品図版の内容と関連情報について解説する。

①画題：「ハルピンのロシア寺院—（ハルピン）夏」



図版出典：軍事郵便／郵便はがき／凸版印刷株式会社印刷

図版サイズ：12.2×8.3 cm（長辺×短辺、以下同）

解説：夏のハルビンの一風景である。画面の両側には生い茂る高木樹「白楊」（ハコヤナギ）が、中央にはロシ

ア正教寺院が描かれる。寺院塔部の形状や外壁デザインの特徴からハルビン市西部にあるイベルスコイ寺院の側面入り口と見られる。ブラウンとグリーンの外壁、ロイヤルブルーの塔頂に黄金色の十字架、そして祈禱する修道女の敬虔な後ろ姿。画面には厳かな静寂さが醸し出される^③。ロシア寺院はハルビンを訪れた日本の画家たちが好んで描いたモチーフの一つである。洋画家栗原信(1894～1966年)にも同寺院をモチーフにした「冬のハルビン寺院」(1936年第8回新美術家協会展出品作)の図版が残されている。

②画題：「冬のハルビン」



図版出典：POST CARD／郵便はがき／満州観光聯盟
図版サイズ：13.5×6.2 cm
解説：冬のハルビンの街外れの路上風景である。石畳の街路、馬の足音がパカッパカッと聞こえてきそうな洋馬車、毛皮コートを身にまとった道行く人々。遠景には工業都市の象徴―集団住宅、工場と煙突が立ち並ぶ。19世紀末頃から「露清密約」(1896年)により満州でのロシア権益が拡大し、ハルビンに移住するロシア人口が急増したが、図版の画面からも欧風新興都市の雰囲気が伝わる。

③画題：「春昼閑庭（南満）」



図版出典：軍事郵便／郵便はがき／凸版印刷株式会社印刷
図版サイズ：12.2×8.4 cm
解説：中国遼寧省(旧満州南部)あたりの長閑な生活風景が描かれる。農家の庭には木が生え、木の枝には鳥籠が掛けられ、籠には観賞用の小鳥が一羽飼われている。

放し飼いの鶏と黒豚、庭を眺める男の子。一束の前髪を残した「桃子頭」という伝統的な(幼い男児の)ヘアスタイルが可愛い。幼少期の息子を2人亡くした鶴田にとって子供を描くことは格別な思いがあったのであろう^④。

④画題：「少女と狗（満洲）」



図版出典：軍事郵便／郵便はがき／凸版印刷株式会社印刷
図版サイズ：12.1×8.3 cm
解説：中国東北地域にある農家の一角、だぶだぶの綿入れを着込んだ小娘と遊び仲間の子犬。春節に子供の成長を見越して大きめな服を新調する当時の生活習慣まで描きこまれている。子供がもたれる背後のシックイ壁には旧正月の貼紙「春聯」が貼られ、それには新春を祝う「福」と両側の対句「天地人一体同春」(空、大地、人々が一堂に新春を迎える)、「福祿壽三星共照」(幸せ、豊かさ、長生きを司る〔オリオン座の〕三星が共に光り輝く)と単句「地徳重如山」(大地の恵みは山の如し)が書かれている。画面の右上には旧年の貼紙が剥がれた跡までリアルに描かれている。



⑤画題：「古き城門」

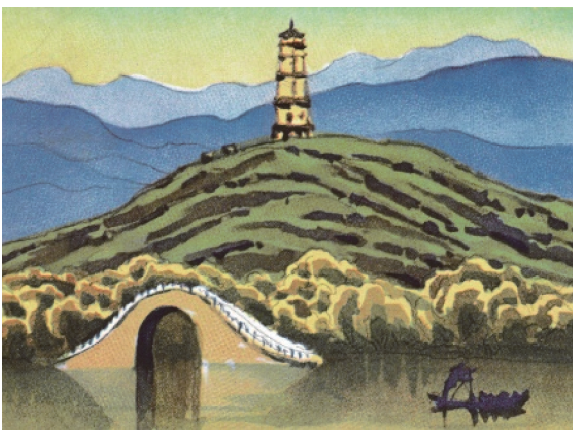


図版出典：軍事郵便／郵便はがき／陸軍需品本廠／株式会社光村原色版印刷所印行

図版サイズ：11.4×8.4 cm

解説：風化した城門、雑草が生える破損した屋根、空が透けて見える楼壁、そして重厚な門構え。画題には具体的な地域名は明記されていないが、見る人には悠久な歴史を感じさせる。この蒼古とした城門を眺めながらスケッチする画家の感動はこの小さな絵はがきの図版からもひしひしと伝わってくる。

⑥画題：「北京城外玉泉山」

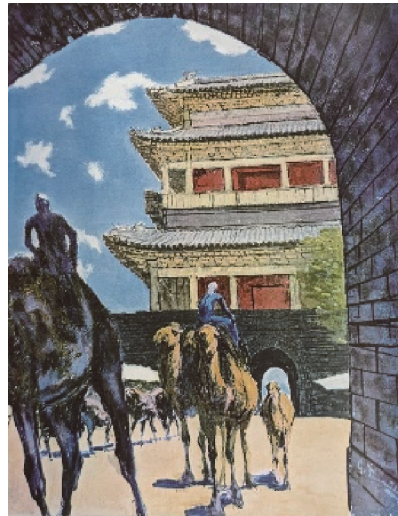


図版出典：軍事郵便／郵便はがき／陸軍需品本廠／株式会社光村原色版印刷所印行

図版サイズ：11.4×8.4 cm

解説：元・明・清の歴代皇帝の休養地として知られる北京郊外の景勝地「玉泉山」の水彩スケッチである。緑豊かな山肌、山頂に聳え立つ仏塔「玉峯塔」と湖水に浮かんで見える「玉帯橋」が美しく描かれている。清王朝の離宮頤和園には「玉帯橋」の姉妹橋と言われる形状の似た「鑼鍋橋」があるが、洋画家狩野寿一（1910～2003年）が戦前描いた「鑼鍋橋」の作品図版も残されている。

⑦画題：「廣安門（北京）」^⑤

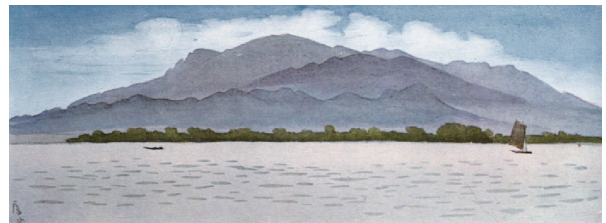


図版出典：『聖戦画譜』／松本金次編／美術報国会／1939年

図版サイズ：21.3×17.6 cm

解説：澄み渡るような北方の夏空、北京城の西の入り口「廣安門」^⑥をくぐる駱駝の行商隊が描かれる。荷物を卸し帰還する運搬夫の陽気なかけ声が聞こえてきそうな情景である。作品に描かれた二つの城門は現在なくなっているが、この図版はかつての広安門と当時の日常風景を知る貴重な資料となる。洋画家神津港人（1889～1978年）にも広安門を描いた作品図版が残されている。

⑧画題：「廬山遠望」



図版出典：『聖戦画譜』／松本金次編／美術報国会／1939年

図版サイズ：16.7×7.1 cm

解説：揚子江と廬山の風景が描かれた淡彩スケッチである。浩浩と流れる大河、水面に浮かぶジャンク船、遠景には雄大な廬山連峰が広がる。江西省九江の廬山はかつて日本の画家たちを魅了してやまなかった。廬山への旅を鶴田と同行した川端龍子のほかに、小林万吾（1870～1947年）、吉田博（1876～1950年）、南薫造（1883～1950年）、吉田初三郎（1884～1955年）、清水登之（1887～1945年）などにも廬山の雄姿を描いた作品図版が残されている^⑦。

4. おわりに

鶴田吾郎は、1945（昭和20）年の終戦頃までの30

年の間に度々中国大陆を訪れ、異なる地域の多様な風景に出会い、その時々感動をキャンパスに描きとめていた。上掲の作品図版からも感じ取れるように、彼は、どのような経緯や身分で訪れたかに関係なく、常に行く先々の自然風景や人々の生活に熱い眼差しを向けていた。われわれはこれらの作品図版から絵画のモチーフ、構図や色彩などの図像学的情報がある程度読み取ることができ、そこから観賞的、美的価値を見いだすことができる。そして、これらの情報を通して、特定の画家の創作活動の経路をたどることができるだけでなく、現存の作品やかつての画展の出品目録だけでは語れない近代日本美術史の一断面をうかがい知ることができるのではないかと思う。

【注】

- ① 鶴田吾郎の自伝『半世紀の素描』（中央公論美術出版 1982 年）の記載による。
- ② 鶴田吾郎の子息（鶴田熙）による『半世紀の素描』の「あとがき」で述べられている。
- ③ 名古屋市美術館所蔵のコンテ素描「哈爾濱（教会）」（1917 年）のモチーフは、本図版と異なるハルビンの中央寺院（聖ニコラ会堂）である（『名古屋市美術館所蔵作品総目録 1999』p. 82 参照）。
- ④ 鶴田は息子を 5 人もうけていたが、2 人は 2 才と 3 才で夭折し、2 人は太平洋戦争従軍中に戦死した。残りの 1 人（鶴田熙）は陸軍通信兵として台湾に派遣され、終戦後に日本にもどり、のちに川端龍子に師事し、日本画家となる。
- ⑤ この作品は 1939（昭和 14）年開催の第 2 回大日本陸軍従軍画家協会展に出品された。現在その原画は千葉県立美術館に所蔵されている。『千葉県立美術館所蔵品目録 1989』（千葉県立美術館 1990 年）掲載のモノクロ写真には、画題「憶ひ出の広安門」、制作年「昭和 14 年頃（1939 頃）」、技法「キャンパス・油彩」、サイズ「116.7×90.9 cm」と記載されている。
- ⑥ 「廣安門」は明代嘉靖（1522～1566 年）頃に建造され、清代乾隆 13（1766）年に改築されたが、中華人民共和国時代の 1956 年頃に、建築家梁思成（1901～1972 年）の猛反対にもかかわらず、内外二つの城門と周辺の城壁ともに当時の北京市人民政府により解体撤去された。
- ⑦ 筆者所収の図版だけでも 26 名の画家による 38 点の作品にものぼっている。